



# 三月の俳句

( 2 0 2 0 / 0 3 )

## 目次

たべもの俳句	モロク俳句	歳時記俳句
14	11	1
）	）	）

例年より早く桜は咲いたが、花見もままならないような新型コロナ騒動。桜は来年の咲いてくれる。ただ私は歳をとる、しかし、くよくよしないで楽観的に。

(宇佐美保幸)メール・zeirisi777usami@aol.com

毎日の俳句は次のブログに  
巢鴨とげぬき徒然俳句  
<https://blog-haiku.777usami.com>

三月はやはり三月明るさよ  
平凡にとりとめもなく水温む

春寒や一進一退迷い道  
春寒や港は活気好漁で

おひな様東京に出て美男美女  
チヨコレートかすかに溶けてひな祭り  
伝統という無駄ありてひな祭り  
路地奥の静かなりけり雛まつり

馬鹿馬鹿と馬鹿がいるから春が来る  
廻る廻る回転木馬に春が来た  
高齢化それがどうした春来る  
春が来て出産ラッシュ山羊牧場  
東口西口ともに春来たり  
春が来てトイレに飾る野の花を  
春が来る街を彩るスニーカー



リヤカーに園児鈴なり春来たる

回転ドアよくよく回り啓蟄や

啓蟄や耳でうごめく虫もいて

啓蟄や虫のわがまま容認し

春だから泣くだけ泣いて東京へ

春となりヒラメが笑う生け簀かな

春先のマスクはやはりピンク色

チョコパンで小さな孫が春を知る

女かと思えば男春の街

一九六四年上京の日は春の雪

降り積もる覚悟はなくて春の雪

春の雪床びしよぬれの山手線

裸婦像の乳房の上に春の雪

春の雪ブログ書いたりうとうと



ぼたん雪無口なポストに積もりけり  
泣いた子も笑顔になるかぼたん雪  
ぼたん雪歩きスマホの若者に

春の雷なぜだが好きになる二人

沈黙を守って冷淡おぼろかな

おぼろ夜に光源氏の幻か

おぼろ夜の新調パジャマありがとう

朧夜の後期高齢生きている

菜の花が咲けば地球が軽くなる

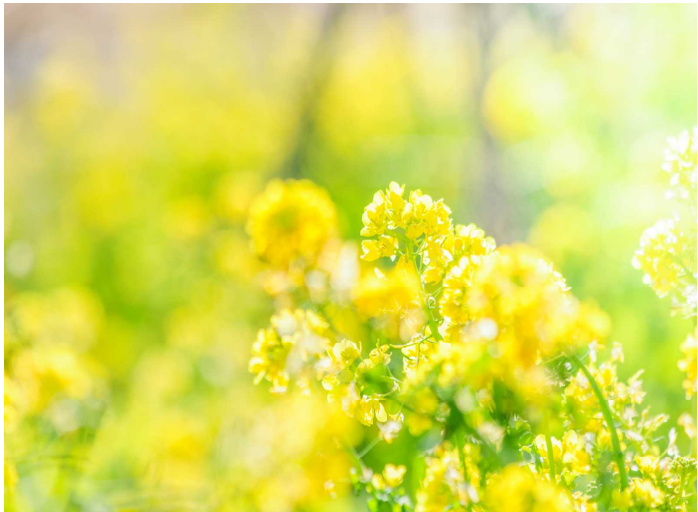
菜の花は数本だけではただの草

菜の花の海をローカル列車行く

富士あれば菜の花あれば楽し日日

割り算のできぬ学生鳥帰る

鶴帰るくうくうくうの音残し



春疾風笑う羅漢は微動だに  
大相撲波乱が続く春疾風  
自動ドア開け閉めたびの春疾風  
春疾風多くの音を包み込み  
五能線車窓の海に春怒濤  
兄弟の津軽三味線春怒濤

猫の恋不倫は駄目よ芸能人  
恋猫を見習うべきか引きこもり  
瀬戸内の潮風香り猫眠る

どれ見ても同じに見える菫花  
ひっそりと暮らしひっそりすみれ咲く  
すみれ咲く心のとげの片隅に  
すみれすみれ今日のは機嫌よし  
庭に咲くすみれはすみれただすみれ



あちこちにたんぽぽが咲く墓参り  
たんぽぽをわざと踏みつけ自己嫌悪  
歳とれど時にたんぽぽ時に恋  
タンポポは美人ではないぽっちやりか  
タンポポは美人不美人哲学者  
たんぽぽや寅さんごとく飛んで行く

ストレスを無縁と思うヒヤシンス  
ベランダで珈琲しますヒヤシンス  
面白い三角関数ヒヤシンス

ジェラシーをまき散らすごと春の雷  
エルメスの騎士像落ちて春の雷

数輪が咲けば芳香沈丁花  
思うことあまりに多し沈丁花



「ではまたね」何時ものように蝶が舞う  
気まぐれに気まぐれに舞う春の蝶  
こんちわ言ったかどうか庭に蝶  
引力があればこそなり蝶が飛ぶ  
きまぐれていつもの通り春の蝶  
もちろんだおまえは自由紋白蝶

春愁や靴を磨いただけのこと  
春愁に金平糖を転がして  
春愁や静かな波にひかりさす  
春愁や静かな波の沙美の浦

どこまでも明るさあふる花モミザ  
花モミザ高血圧が続く日々  
群がりてまぶしまぶしくミモザ咲く  
零れぬか零れぬようにミモザ咲く

彼岸かな洗い観音ツルツルに





デイスプレイ薄き埃は黄砂かな  
黄砂降るローカル線には無関係  
黄砂降る金剛力士の頭にも  
怒り眼の仁王のお顔に黄砂降る  
格差いまそれも必然黄砂降る

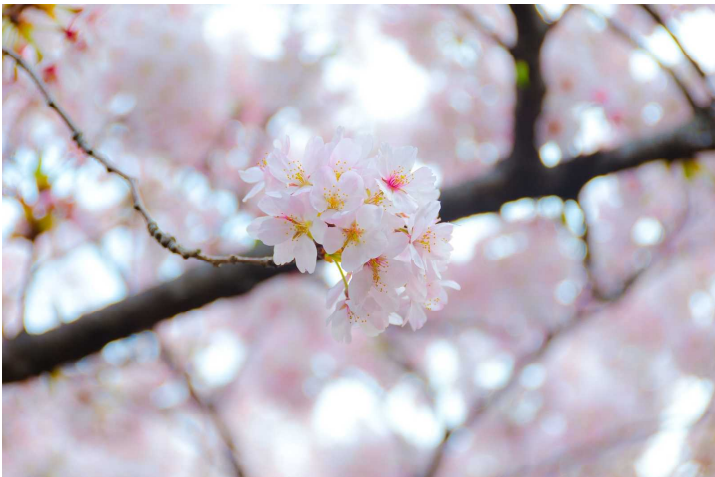
花粉症脳の回路がグチャグチャに  
花粉飛ぶ春は汚れて涙する

燕来るただいま日本語勉強中  
初燕何を告げるか霊園に

今まさに蕾む桜に日も風も  
桜咲くナシヨナリズムを考える  
桜咲く会えなくなるね見送られ  
桜咲く優先席も満席だ  
失恋し失恋重ね桜咲く



終点は電機大学桜咲く  
 桜咲く道ずれほしき女あり  
 要するに桜は桜桜咲く  
 日暮里の夕焼けだんだん桜咲く  
 無人駅そして無住寺桜咲く  
 過疎の村静かに静か桜咲く  
 家々に引きこもりあり桜咲く  
 桜咲くむかしむかしのあの日から  
 妬みたりうらやみたり桜咲きたり  
 桜咲き遠き記憶を呼び戻し  
 銭湯は昭和の名残桜咲く  
 よういどん周り見回しさくら咲く  
 顔洗ふ桜の写真カレンダー  
 桜待つ電子決済靴を買う  
 さくらさくらワイディンググラスの底の彩  
 三畳の部屋は快適さくら咲く



天に向き潮目も変わり白木蓮  
空に向け何を叫ぶか白木蓮  
はくれんが月の明かりに祈りけり  
白木蓮愛情だけの母でした

紫式部あなたも見たか柴木蓮  
中耳炎それでも花を紫木蓮

春の風あちらこちらに交差点  
春風にあがらう吾の惚けた脳  
白粥に梅干し添えて春の風  
ロボットに春風などはわからない  
唇に勇気をわかす春の風

目高好き孤独も群れも共に好き  
君たちはどう生きるべきか目高たち  
風雨だし目高の産卵夜が更ける



いじめられかたばみの花見つけし子  
頑張れば嫌われるだけかたばみは  
頑張るな言つても無駄かたばみは  
こんなにも咲いて踏まれてかたばみは  
東京に花冷え強くコロナ有り



モーロク俳句

モーロクしそれはさておき薄紅梅  
モーロクしのろまとなつて春來たる  
モーロクしだんだん子供春めいて  
春となり隙間より落ちモーロクし

ひな祭りモーロクすれば酔い潰れ  
桃の日はモーロクすれどちらし寿司

朝寝してモーロクすれば甘えけり  
三月やこんがらがってモーロクす  
モーロクし齒痒く思う落椿

モーロクしぼんやり眺む春の雲  
モーロクし長き眠りに春の鳥  
モーロクし言葉のトゲに鴨帰る



モーロクや怒りの蕾沈丁花

モーロクし飽きもせず見るぼたん雪  
モーロクし即かず離れずなごり雪

モーロクし見栄を積み上げ花しきみ  
モーロクしそして頬杖ヒヤシンス  
モーロクしそれでもたまに春の夢  
うらやましモーロクしても猫は恋  
涅槃の日モーロクしても生きること  
デコポンが好きでモーロクまだ恋も

モーロクしあれなんだつけ春の風  
春風に転ぶモーロク不覚なり

モーロクし惰性となりしシクラメン  
モーロクし居心地悪く春の草  
モーロクし迷いを捨てて春の草



春は曙チョコパン食べてモロクす  
おぼんやりとただぼんやりと春の月  
おぼろ月頭もおぼろモロクし  
モロクし小憎らしくて春の月  
モロクし爪を噛む日の菜種梅雨

モロクし考えもせず彼岸過ぎ  
桜餅モロクすれば病増え  
鳥帰るモロク人はうすつぺら

春眠や脳味噌狂ふモロクし  
モロクしペンペン草の花盛り  
たんぽぽや鼻ふくらませモロクす

ひとときはモロク忘れ桜咲く  
桜咲くそれがどうしたモロクし  
モロクし溺れ溢れる花の下  
モロクし花に溺れて酒に酔い



たべもの俳句

春が来てカリカリベーコン目玉焼き  
目玉焼き偏差値があり春が来る

うぐいす餅食べれば口も鶯に  
モーロクしうぐいす餅にむせており  
蛤をひとつひとつの椀に入れ  
たこ焼きの春はいずこにあちち

しらす干しこぼれるばかり納豆に  
しらす乗せピザトーストや海の味  
しらす入れペロンチーノや潮の香が  
しらす干し目玉しっかり開けている  
変心やしらすに混じる河豚もいて

冷凍の焼売チンして春の朝





合わせ味噌いくつ合わせて春の朝  
わかさぎの佃煮添えて春の粥

春野菜チョッパ―使い微塵切り  
ジャズ聴いて浅蜷佃煮煮る男  
蒟蒻はなぜかぶるぶる春の雪  
萬世のパーコーメンや春の雪

わかめスープアンチエイジング髪黒く  
大福も憎くなりしか春の月  
あんパンのへそをめぐけて白木蓮  
春宵のスープ温めそこに明日

涅槃には赤飯炊いて夕餉かな

茹でられてブロッコリーは歓喜する  
ブスで良いクリームシチューのブロッコリー



蛭鳥賊独り占めして夕ご飯  
ホタルイカ入り海風のスパゲッティ  
ホタルイカ箸ではさんで考える

あんパンに種あるごとし春の雲  
パスタには何故かタバスコ春の雲

たこ焼きと焼きそば競う花八分  
卵焼き今日は上出来春うらら  
うららかなや錦糸卵でちらし寿司  
三月のおやつは決まる甘納豆  
燕来るおやつあつらえ甘納豆  
お彼岸にたこ焼き八個妻と食ふ

コッペパン館をはさんで桜咲く  
コロツケは肉屋に限る桜咲く  
白粥に梅干し一つ桜どき



花冷えや上手く焼けたぞ卵焼き  
花冷えやお粥にのせる塩昆布

町中華ニラレバ定食春疾風

蕪青しニラレバ炒め精をつけ

蕪の青脳を直撃性欲を

匂うからニラは嫌いスキスの前

炊飯器湯気もみどりや菜飯炊く

朧夜や羽根つき餃子パリパリに

朧夜に屋台で食べる羽餃子

トーストにしらす山盛り光る朝

塩ラーメンにキムチを添えて春の昼

さえずりが聞こえて朝のパンケーキ

からあげをコンビニで買う糺ぐもり

(よなぐもり)



